

ライフ オン ザ ロングボード

2006(平成18)年4月12日鑑賞〈東映試写室〉



監督・原作＝喜多一郎／出演＝大杉漣／勝野洋／大多月乃／小栗旬／麻宮美果／小倉久寛
(オフィス キタ配給／2005年日本映画／102分)

……この映画のテーマは、定年後のスローライフのお薦め。しかし、民主党の代表選に敗れた菅直人氏が団塊党の結成を目指したことからわかるように、55歳でサラリーマンを定年退職して、スローライフへ一直線という考え方は……？ もっとも、単身種子島に渡り、サーフィンに挑戦する姿を観ていると、これってスローライフの楽しみ方ではなく、新しいことへの再チャレンジなのでは……？ しかして、ハイライトとなる「ポセイドン」への挑戦は……？

映画のテーマはスローライフ……？

私はこの映画のパンフレットを読んではじめて知ったが、喜多一郎監督は「TV番組制作では、音楽、南の島、スローライフ、人間の真の姿を描いた良質な番組を数多く制作している事で知られている」とのこと。

しかして、「南の島三部作」の2作目にあたるこの映画でも、そのテーマは、スローライフの薦め。そしてそのために設定した舞台が種子島であり、その小道具はサーフボード……。

今ドキ、55歳定年ってあり……？

この映画の主人公、米倉一雄（大杉漣）は、株式会社マルカネフーズの経理部長代理。そして今日は、55歳の今まで真面目に勤めあげた会社を定年退職する日。部下たちから感謝の辞を述べられ、花束を受け取って部屋を出た一雄が出会ったのは、今や一雄のはるか上の地位に出世している同期生。その皮肉いっぱいの

「バンザイ」の声に送られて帰路についた一雄だが、よく考えてみれば今ドキ、この株式会社マルカネフーズのような55歳定年の会社なんてあるの……？

リストラや肩たたき退職ならわかるが、この映画を観ている限りそうではない。一雄にとっては、定年まで黙々と勤めあげたことが、2年前に病気で亡くなった妻の日出子と、今なお元氣な父親に対する唯一の誇り……？ しかし、こんな人に限って、定年後の人生設計はゼロ。そのうえ趣味もゼロだから、会社へ行かないことになればすることなし。それでは、スローライフの楽しみも何もあったものではないが……。

スローライフの楽しみ方 VS 団塊党の結成は……？

偽メール事件で大打撃を受けた民主党は、3月31日の前原誠司代表の辞任を受けて、4月7日、小沢一郎 VS 菅直人による代表選が実施された。私がここで言いたいことは、新党首に選出された小沢戦略がどうこうということではなく、代表選でまたも敗れた菅直人が、前回の敗戦後に打ち出した団塊党の結成のこと。戦後60年を経た今、少子高齢化という避けることのできない現実を目の前にして、団塊の世代の活用は、日本国にとって大きなテーマだから、私はこの菅直人の活動に注目している。

そしてこの団塊党の結成は、60歳を迎えようとしている団塊世代が、今なお社会のさまざまな分野で活動してもらいたいという願いを込めたもの。したがってこれは、喜多一郎監督お薦めの「スローライフの楽しみ方」とは正反対の発想……？ さて、私と同じ団塊世代の人たちは、スローライフの楽しみ方と団塊党の結成によるひと暴れのどちらが好き……？

やっぱ美人はトク……？

この映画には、亡くなった一雄の奥さん、日出子の他、紅二点(?)として、一雄の次女の米倉優(大多月乃)と、種子島でレストランを経営している萬太郎(小倉久寛)の娘、萬愛子(麻宮美果)が登場する。優は、結婚した長女が家を出た後、父親と一緒に生活しているが、就職先が決まらないうえ、父親との関係がギクシャクしている状態。そのうえ、母親が息を引きとる際、父親が病院に駆

けつけて来なかったことを、今だに引きずっている状態……。

これに対して愛子は、単身はじめて種子島の空港に降り立ったものの、サーフボードを抱えて、タクシーにもバスにも乗れない一雄をフォローしてあげたやさしい地元のピチピチギャル。こんな2人をスクリーン上で対比しながら観ていると、やはりオッサンの目はどうしても魅力的な愛子の方に……。

そしてこれは、スケベオヤジの私だけではなく、一雄だって同じ……。やっぱり美人はトクだね……？

銀二はなぜ……？

飯田銀二（勝野洋）は、種子島のサーフショップ「ORIGIN」の経営者だが、実は彼は島1番のサーファー。そんな銀二を一雄のサーフィン指南役として紹介したのが、愛子だった。

「ORIGIN」でバイトをしている丸山憲太（小栗旬）らは、銀二がこんな一雄にどう対応するのか、興味津々で見守っていたが、意外にも銀二の答えは、「それでは明日の朝5時に集合」というものだった。

銀二はなぜ、こんな定年退職したサラリーマンの第2の人生をサポートしてやろうと考えたのだろうか……？

団塊世代のオッサンはおおむね真面目……

今ドキのヘラヘラした若者（？）に比べれば、われわれ団塊世代のオッサンたちは、全然負けてはいない。こんな言い方をするかどうかは別として、気の弱い、控え目な性格の一雄だって、いざ「銀二道場」への入門が許されたとなると、がぜん張り切るもの。

団塊世代のオッサンたちに共通するのは、①先生の教えには忠実、②基礎に忠実で、イヤになるような反復練習もいとわない、③与えられたメニューはいくらしんどくてもサボらない、ということ……？

腕立て伏せ、スクワット、腹筋、背筋各50回など、自らに課したメニューを黙々とこなしていく一雄の姿は、最初は東京から来たヘンなおじさんという雰囲気だったが、次第に愛子や憲太からも尊敬の眼差しが向けられることに……。

そんな中、一雄も次第にサラリーマン生活の中で見失っていた自分を取り戻し、島の人たちとの人間関係はもちろん、ある日種子島を訪れてきた優との父娘関係においても、打ち解け合っていくことに……。

父娘の信頼は……？

種子島でサーフィンと毎日格闘を続ける一雄とは対照的に、1人東京に残った優の就職活動はままたならず、敗北の連続……。さらにこれに追い打ちをかけるように、彼氏との仲も……。そんな優がなぜ種子島を訪れてみようと思ったのかは、直接彼女に尋ねてもらえない……。

しかし、種子島の生活の中で一雄が大きく変わっていったように、種子島の生活の中で銀二、憲太、愛子などと触れ合い、またあらためて父親と向き合う中で、優の気持ちにも大きな変化が……。

そんな中、グッと深まったのが、父娘の信頼。「なぜお母さんの最後の日に病院に来なかったの？」とはじめて涙ながらに父親に訴えかける娘に対する父親の答えは……？

この種子島においてはじめて展開される父と娘との間の気持ちのぶつかり合いが、この映画の見どころの1つだから、それをじっくりと……。

『ブルークラッシュ』との対比は……？

この映画は、種子島のサーファーたちとの人間的な交流の中で、定年退職後の新たな生き方を見つけていく一雄の姿を描くものだが、サーフィンの本場はやはりハワイ……。？

そんなハワイのオアフ島においてサーフィン大会の優勝を夢見る地元の女の子の活躍を描いた映画が『ブルークラッシュ』（02年）（『シネマルーム3』396頁参照）だったが、この映画を観てはじめてサーフィンというスポーツの激しさにビックリしたもの……。

しかしこの映画は、あくまで定年退職した一雄が新たにサーフィンに取り組んでいく姿がメインだから、そのレベルの差は明らか……。『ブルークラッシュ』と対比したのでは、はじめからかわいそうというものだが……。？

🎬 ハイライトシーンは肩すかし……？

『ポセイドン』は今年の夏公開予定の大作で、あの『ポセイドン・アドベンチャー』（72年）と同じテーマ……？ しかしてこの映画でも、種子島サーフィン最大の名物はポセイドン……。もっとも、これは船の名前ではなく、台風シーズンに種子島を訪れる最も高い波を指す言葉とのこと。そして、種子島では、このポセイドンを征服しなければ、一流のサーファーとは言えないらしい……。

銀二はもちろんこの「ポセイドン」を征服して、島1番のサーファーの称号を手をしているが、既に1度失敗した憲太は……？ そしてやっとサーフボードの上で立つことができるようになったばかりの一雄は……？ ボードを抱えた3人が並んで砂浜を海に向かって歩き出し、いよいよポセイドンへの挑戦……。待つてました、ハイライトシーン！ と思ったが……？

🎬 娘の選択は……？ そして父親の選択は……？

突然島を訪れてきた若い女性に、憲太の目が向いたのは当然。父親からも一緒にこの島で暮らさないかと勧められ、また好意を持ってくれていること明らかな憲太からも、「東京に帰るのか？」と質問された優は、「まだしばらくはこの島にいる」と答えた。1人東京に戻り、再度就職活動に苦勞するよりも、このまま島で過ごす人生の方が楽しそう……。彼女がそう考えたことはまちがいないはず。しかして、最終的な優の人生の決断は……？

他方、今やサーフィンの腕もなかなかのものとなり、車の運転免許まで取得した一雄の人生の選択は……？

「人間は生きていだけで幸せなんだ」という島の独り暮らしのおばあさんの言葉が素直に実感できる、心温まるスローライフ映画に拍手……。

2006（平成18）年4月13日記